

小林寛 提出 学位申請論文（課程博士）

『近代東アジアの思想家における神道観』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は近代東アジアの思想家が、日本の神道をどのように理解し、神道把握の特徴が如何なるものであったかを明らかにしようとした。序論では「1 研究目的」「2 研究方法」「3 研究対象」「4 先行研究」を記述する。

第一章「東アジアの『神道』」においては、『論語』と『易経』にみえる「神」と「神道」の用語のもつ意味を、東アジアの儒教の伝統から再確認しようとしている。『論語』にある「神」の用語には「神」を祈る対象とする例があるが、神

自体についての記述は見られない。『易経』においては、「神道」の用例があるが、「くすしき力」を意味するのみで、いわゆる「神の道」と異なる。日本の神道に関する東アジアの思想家の「神道」観は、これらの儒教的な「神」「神道」の解釈の影響を受けているという。本章の後半で津田左右吉の『日本の古典』を取り上げ、本書には先入観による思い込みがあることを明らかにしようとした。

第二章「魏源の日本評価」においては、アヘン戦争直後に位置づけられる洋務運動の思想家・魏源（一七九二～一八五七）の日本観および宗教思想を考察している。魏源の『海国図志』における日本の記述には、「神道」の語を用いた例がなくとも、清潔を重んずる日本の生活の姿が描かれ、神道を基底とする日本文化に由来する清浄感が記されている。魏源の『海国図志』は、日本の対西洋の方策の参考とされ、日本の国防問題に大きな影響を与えた。

第三章「張之洞の日本観」においては、張之洞（一八三七～一九〇九）の日本観および宗教観を取上げている。魏源も張之洞も洋務運動の思想家であり、「中

体西用」を掲げ、伝統的な体制を維持しながら、西洋技術の導入を図ろうとした。張之洞の場合も、日本の神道についての記述はほとんど見られない。しかしその日本観において、神々を尊崇する天皇が、国家を統合しているという理解や伝統精神を重んずることへの洞察が窺える。張之洞は清朝の中枢にあって、皇帝制度と儒教精神とを「中体」として、国家の根幹であると考えていたことを明らかにする。

第四章「康有為の神道観」では、変法運動の思想家としてもっとも著名な康有為（一八五八～一九二七）の神道観を中心に論述している。変法運動とは、法律や制度を変革して、西洋的な立憲君主制、議会制度、選挙制度などを導入しようとするものだ。康有為をはじめとする変法運動家に、その成功例として、日本の明治維新を参考にしようとした。康有為は『日本変政考』を執筆し、天皇が中核となって中央集権国家を建設したことが、日本を強勢にした要因と論じている。また日本は天皇と国民との親近性のあることや、神道を国家の儀礼として、国教

的に理解していた。そのことが、儒教を国教にしようとした孔教運動の契機になったという。ただし康有為は西洋の政治制度は、実は『礼記』『礼運』に淵源があるという、政治制度の中華起源論を主張。彼の主要三部作『新学偽経考』『孔子改制考』『大同書』のうち、『大同書』は平等・平和・扶助の理想社会の在り方を提示し、東アジアの思想家に大きな影響を与えた。

第五章「黄遵憲の神道観」においては、変法運動家の一人である黄遵憲（一八四八〜一九〇五）の日本観および神道観を記述している。黄遵憲の『日本国志』は康有為の『日本変政考』よりも早く執筆され、神道についても、比較的詳細な見解がみられる。日本の神道は道教に類似しており、道教に淵源があると捉えた。また近代化に際して、日本文化を生かす上で神道を国家儀礼として採用した。つまり彼は、日本の伝統を重視することによって、政治制度の变革を成功させたと見る。その伝統は中華の文化を起源としているとも、主張している。

第六章「金弘集と日本」では、朝鮮半島の金弘集（一八四二〜一八九六）の日

本観を考察する。彼は前述した黄遵憲の『朝鮮策略』を評価・参照して、世界勢の中の自国を理解していた。日本への「修信士」として派遣され、日本の事情を認識し、大韓帝国の総理に就任した際は、日本に「紳士遊覧団（具体的には留学生）」を派遣して祖国の強勢化に努めた。金弘集においても、日本の宗教政策を踏まえて自国の政治に採用しようとしている。また日本の神道についての言及がないため、明白には言えないが、否定的に捉えていない。彼の政策によって日本に留学した学生達は、日本の人士と深いつながりを有しながら、自国の固有性とアジアの共通性についての思索を深め、日本の政治制度の变革を参考にしようとしたことは確認できる。

第七章「李炳憲における神道」においては、朝鮮半島の出身でありながら康有為の弟子であった李炳憲（一八七一～一九四〇）の思想や神道観を取上げる。康有為の影響を受けた李炳憲は、儒教を国教として、国家儀礼を整備しようとする。日本の併合下でありながら、自国の自立を考え、同時に世界が「大同」の世

になることを摸索した。その際、「帝は東より出ず」という『易経』の言葉を引用して、東アジア三地域の神々すなわち朝鮮の神にも日本の天照大神をはじめとする神にも中国の上帝も、朝鮮の「白山」＝「白頭山」より出たもので、名を異にしても同じ存在であると主張。日本の『古事記』や『日本書紀』についての言及はあるが、朝鮮半島が東アジア、ひいては世界の「故地」であると見なしていた。

第八章「朴章鉉の神道観」では、日韓併合の時代に民族儒教の確立に力を注ぎ、近代的な民族意識による自立をめざした朴章鉉（二九〇八～一九四〇）の神道観を論述している。彼は二松学舎で学ぶ体験を有し、『日本略史』や『詠日本史』などを著わした。神道については、日本の「国家の宗祀」たる神道を、自国の自立のために参照している。自立には、民衆の精神の紐帯が必要と考えていた。靖国神社を詠んでいる詩には、「臣民」という言葉で天皇を中心とする王道を支える民衆を評価している。

「結論」においては、これまで取り上げてきた七人の近代東アジアの思想家における神道観を、以下のようにまとめている。神道に対する肯定的な評価は、特に変法運動の思想家を中心に政治的変革の側面から、儀礼の意味においてなされていることが明らかになった。神社については、儒教的な廟の概念から把握され、神道儀礼は政治的な「礼」であり、国民の精神の統合的な機能として理解され評価されていた。近代東アジアの思想家は、日本の神道をそれぞれの思想的世界構想の中に位置づけて、理解していたと結んでいる。

論文審査の結果の要旨

本論文は近代東アジアの思想家が、日本の神道をどのように理解し、神道把握の特徴が如何なるものであったかを究明しようとした論考である。そのために、清朝時代の魏源・張之洞・康有為・黄遵憲の四人、朝鮮半島では金弘集・李炳憲・朴章鉉の三人を取上げ、人物像や思想および日本観や神道観などについて論じ

ている。そこで彼らが、日本や日本の神道をどのように把握していたか、論者の見解を整理してみたい。

東アジアの思想家が日本の明治維新について注目していたのは周知の事であるが、維新以前日本は他の周辺諸国と相違のある見方をされていた。アヘン戦争中林則徐に依頼されて執筆した魏源の『海国図志』には、ルソンやジャワなど日本と面積は同じなのに、前者は「併呑」され、後者日本は「強盛を誇っている」と評価されているのは興味深い。明治維新後の日本については、法律や諸制度を改革して国力の増強を図ろうと「変法運動」を展開した康有為・黄遵憲・梁啓超（一八七三～一九二七）らが、日本に注目したのは当然であった。とくに『日本変政考』を執筆した康有為は、「保皇」を主張しながらも、皇帝と臣下や民衆とが隔絶した従来のあり方を批判。日本は、君主と民衆とが一体となろうとしている点を高く評価している。また朝鮮半島の思想家たちが、開国後日本に強い関心を向け、明治維新後の日本の政治制度をはじめあらゆる分野における変革の状況

を知ろうとしたことを確認する。金弘集は日本視察のため二度も「修信使」として派遣され、日本についての報告書を上奏。彼が総理大臣就任後は、日本に留学生を送った。朝鮮半島の思想家が日本に関心に向けた理由は、なぜ日本が「強盛な国」になったかを知ろうという意識が強かったと、主張している。明治政府においては天皇を中心とした王道の確立が、日本強盛の要因であった。朝鮮にも王は存在したが、日本のように民衆と共にあるという意識が皆無であったことを反省しているとみる。

東アジアの思想家の日本の神道観および神道把握の特徴について、論者の主張を整理すると以下のようなになる。清朝の思想家と朝鮮半島の思想家との間には若干の相違はあるが、儒教的伝統や孔教運動の影響もあって、日本の神道を儒教的背景から捉えようとしていた。二、三の例をあげると、(1)神社は儒教的な廟の概念で捉えている。日光東照宮は、時代を代表する人間の霊を祀るところ。靖国神社には「忠臣」という言葉で、天皇のためにまたは国家に奉仕する民衆の霊と

して評価する。(2)日本の神道や神は「道教と同じ」とか「道教に淵源をもつ」という捉え方をしている。(3)近代化を進めるに当っては、自国文化を生かす工夫が不可欠であり、そのために国家儀礼としての神道が、重要であったと把握。清朝や朝鮮半島の思想家たちには、儒教的伝統が背景に存在したため、儒教を国教もしくは国家儀礼として位置づけようとした。日本は明治維新後、神道を国家の儀礼に位置づけることに成功した政策を、彼らは参考にした。(4)彼らは自己の内面の課題については、日本の神道を評価していない。あくまで儒教的世界観の中に、神道を位置づけて理解したのに過ぎない、と受けとめられる。

東アジア社会の経済・政治・文化などの交流がますます盛んになる現代においても、第二次世界大戦前の状況がどのようなものであったか、現在の日本人はあまり関心があるとは思われない。況んや近代東アジアの思想家が、日本や日本文化の基底といえる神道について、どのように把握していたかなど、ほとんど知らないと言えよう。しかし現代の東アジアの人々をより良く理解するためには、近代

の東アジアの思想家が日本をどのように観ていたか、日本の宗教をどのように捉えていたかなどを正しく認識することは重要である。近代の欧米人による日本観や神道観についての観察や研究の書物も多いとは言えないが、ある程度の著述は残されている。それに比較すると、これまで近代の中国・朝鮮半島の思想家による当該テーマに関わる研究は、皆無に近いと思われる。その意味で、近代東アジアの思想家における神道観研究を中心とした本論文は、高く評価されるべきだ。またこれら思想家についての見解も、それぞれの典拠を克明に提示しながら、論述して説得力がある。

しかしながら、若干の批判を述べると、近代東アジアの思想家を取り上げるに際して、魏源・張之洞・康有為、黄遵憲・金弘集・李炳憲・朴章鉉等七人だけで、近代東アジアの思想家を代表して良いのかどうか、疑問は残ろう。たとえば清朝では孫文（一八六六～一九二五）や魯迅（一八八一～一九三六）、朝鮮半島では金玉均（一八五一～一八九三）や朴泳孝（一八六一～一九三八）等は同時代

人であり日本との交流があり日本観を有していた。日本の宗教や神道への言及が全く無かったから取上げなかったのかどうか。つまり方法論的に言えば、どうゆう人物を対象にすることによって、「近代東アジアにおける思想家」を代表することになるのか、についての議論があっても良かったのかも知れない。このような問題の困難さを十分承知しながら、敢えて述べて置く。また引用の仕方につきさか問題があり、とくに津田左右吉著『日本の古典』の引用文が長く不適切という印象をもった。けれどもこれらの点は、本論文全体を損なう瑕疵とは言えない。

以上のことを総合的に判断すると、本論文の提出者小林寛氏は博士（神道学）の学位を授与される資格があると認められる。

平成二十三年二月十八日

主查	國學院大學教授	安蘇谷	正彦	印
副查	國學院大學教授	井上	順孝	印
副查	國學院大學教授	武田	秀章	印